

資料涉猟余話

その60

日夏は「わたくしは、少青年期の五六年を赤門青年文士の空気を

夏之母・以しの弟で、飯田知久町樋口家の長男である。松本中学から第一高等学校、東京帝国大学文科哲学哲学科へと進学し社会学を修めた。典型的な秀才で、大学院に進みながら明治・國學院・仏教

性主義の立場から、雑誌『太陽』に「美的生活論を読んで橋生子に与ふ」を寄せ反論した。これ発端として1909年に文芸革新会を結成し、反自然主義運動を展開する。

桂月、鹽井雨江、武島羽衣の美文韻文花紅葉

をしながら、大町イチエを聲高に論じることが登張竹風で、酔ふとさめざめと紅涙して悲泣哀哭する泣上戸が姉崎嘲風である。ある時は井上哲次郎の愛婿吉田熊次に、何んたい熊公と喰つてかかった。彼も亦井上翼軒の姪婿であつた。叔父はその扱ひに一寸弱つて見えた。柳田國男はお上品に飲み、辞典の金澤庄三郎はのんびりい

京し、小石川白山御殿の叔父樋口秀雄（龍峽）宅に身を寄せ、早稲田大学を卒業後、26歳の時、1916年に鎌倉に居を構えるまで、日夏はこの叔父の庇護下にあつた。

この叔父龍峽は、日龍峽は、道徳主義・悟

はばふべき）編輯委員

はめいめい我流で歌は

醒雪成一で、お台所ま

黄眠先生が行く 10 叔父龍峽樋口秀雄(上)

鳴 不 濁

文学者・評論家・龍峽が中学生に愛読された日夏耿之介に与えた影響は大きい。「わたくし

の二三年前まで帝國文學（饗宴の前身とも云

はめいめい我流で歌は

醒雪成一で、お台所ま

はめいめい我流で歌は

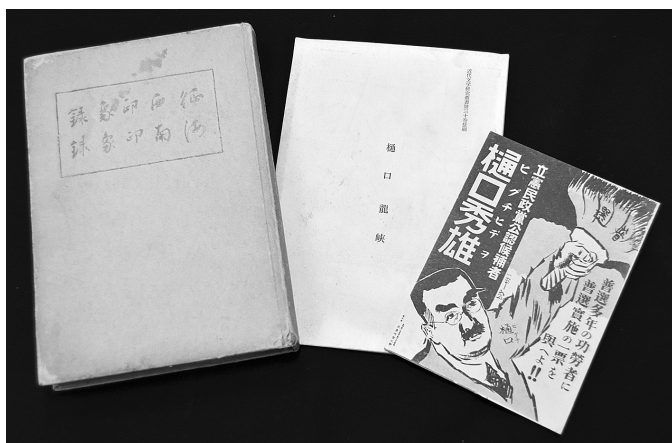
この叔父龍峽は、日龍峽は、道徳主義・悟

はばふべき）編輯委員

はめいめい我流で歌は

醒雪成一で、お台所ま

はめいめい我流で歌は



遺稿集と選挙運動チラシなど (MSC蔵)

の文壇の知り合いには、この龍峽人脈が実に多い。

公算社団法人南信州地域資料センターに寄贈された書籍の山の中には、龍峽が編集に尽力したと思われる『帝國文學』や、遺稿集『征西印象録・海南印象録』(昭和5年)などの資料も埋もれている。(続く)

*好評発売中!

鳴不濁著『黄眠先生が行く 日夏耿之介残影』
(南信州新聞社刊)

